

「60年代のアフリカ」から思うこと

堀尾輝久

第6回研究会〔7月25日〕は「海外での外交・商社体験から見た憲法9条の意義」というテーマで、元外交官の五月女光弘さんと、商社9条の会の浜地道雄さんに、それぞれユニークな視点から、お話をうかがうことが出来、わが会の視野を広げそのグローバルな意味を考える良い機会となった。

五月女さんは「アフリカ諸国の独立と日本国憲法の影響」というテーマで、大使として関わったアフリカでの経験について「アフリカを見直した」と語られた。1960年代はアフリカの独立の年とも言われ、57年のガーナを先頭に60年には17の独立国が誕生する。独立に際して国旗や憲法をどうするかが重要な課題となるが、その際日本の国旗が、ライジング・サンとして注目され憲法の平和主義が参考とされたと語られた。また、アフリカ諸国の本音を代弁すればとして「1960年代に独立した多くの国々は本当に貧しいのです。食料も不十分、医療品も足りない。教育に必要な学校も足りない。経済発展に必要な工場なども建設できない。でも元の宗主国は軍隊のために武器を買うように圧力をかけてくるのです。我々は戦争をしない平和な国になりたいのです。」これが本音なのだと語られた。平和国家日本、そして敗戦の廃墟のなかから経済的にも立ち上がり、64年の東京オリンピックを目指す日本が参考にされたのは当然であったと言う五月女さんの指摘は説得力があった。また憲法の成立過程で幣原喜重郎の果たした役割の大きさが強調されたことも、うれしいことだった。

ところで「60年代アフリカの年」は私たち（の世代）にとっては強いインパクトを持った歴史事実として記憶されている、そしてそのことを私たち自身も忘れてきたのではないか。五月女さんの講演はそのことを思い起こさせるものであった。私たちの世代の、「60年代」の世界史への当時の思いを書き付けておきたい。思えばそれは、私にとってのアジア、アフリカ、ラテンアメリカ(AALA)の発見の時代であった。日本での「60年安保」時代と重なる。ときは冷戦体制のさなか、AALA 諸国は悲願の独立・非同盟を求めて声をあげる。バンドン会議（1955）はこの目標へ向けての大きな1歩だった。国連憲章や世界人権宣言はその共通の理念的支えであった。旧宗主国からの独立、国造りの方向は宗主国への追従ではなく、統一アフリカと社会主義が目指された。当時、アフリカの指導者達の発言が出版され、日本にも翻訳紹介された。

57年最初にイギリスから独立したガーナのクワメ・エンクルマ『わが祖国への自伝』はすぐに翻訳紹介された（野間寛二郎訳 理論社'60）。58年にフランスから独立したギニアのセク・トウーレは講演でアフリカの独立と統一を訴え（『アフリカの未来像』小出・野沢訳理論社'61）、60年にフランスから独立したセネガルで、negritude 文学の旗手でもあったサンゴールは「アフリカの道」を社会主義に求めた。60年にベルギーからの独立を担い、翌年35歳で暗殺されたコンゴのパトリス・ルムンバは『息子よ未来は美しい』（榊利夫訳 理論社'61）を残し、読んで感動した記憶が甦る。ケニアのケニアッタ大統領の『ケニヤ山の麓で』も手元に置いた覚えがある。これらの本は小宮山量平の理論社が新しい人間双書で次々に出

版、岩波も『アフリカの目覚め』や『鎖を断つアフリカ』を出して世界の新しい流れを伝えようとしていた。岩波年表を見れば59年はキューバ革命、シンガポール独立〔イギリス連邦内自治国〕。60年のアジア・アフリカ連帯会議には52ヶ国が参加〔コナクリ宣言〕、年の暮れには国連総会で「植民地独立宣言」採択（AA43ヶ国提出）とある。

私たちの青年期、大学院生の頃から研究員として参加した国民教育研究所では上原専禄先生の「世界と教育」研究委員会を中心に60年前後のアジア、アフリカ、ラテンアメリカの独立と連帯の動きが世界史の捉え直しの焦点になっていた。教育学の古川原先生や勝田守一先生もよき理解者であった、というよりそこで学んで居られた。しかし日本は逆コースのなかにあった。岸信介の憲法調査会も始動する（58年）。教科書検定で不合格となった上原専禄、江口朴郎の『日本人の世界史』が岩波から検定不合格本として出版〔60年〕され注目される時代であった。当時の私達にとっては、日米安保条約改定問題（60年安保）に向き合うことは日本の真の独立と平和への闘いだった。それだけにAALAの動きは、身近なものとして感じていたのである。アフリカの独立国と宗主国との関係は独立のありようを規定し、2つの世界の対立も独立国の進路選択を規定した。独立を支援したソ連、中国の対立も顕になり、それぞれの独立国との関係、援助の質にも問題があった。アフリカ諸国にとって、独立とは帝国主義支配の裏返しではあっても、アフリカの統一性を保障するものではなかった。それゆえ、地域の自立と連帯による「アフリカ連邦」こそが彼らの共通の理念であった。60年代の独立はそのための第一歩だった。それがいかに困難な道かということは、冷戦構造のなかで、EU〔旧宗主国〕との関係、さらにソ連と中国の対立関係が援助に影響をあたえ、ODA(政府援助)の支援も独立とアフリカ連邦の理念からは多くの問題点があった。独立から50年が過ぎて、ソ連の崩壊、アメリカの一極支配も陰り、AALAの新しい連帯の動きが大きくなってきているのが現在であり、AALAの再発見の時代が来ているといえるのではなからうか。アジアではASEAN+TACの動きがあり、LAでは中南米の連帯の動き、南アフリカにはアパルトヘイトと非暴力で闘ったネルソン・マンデラ、女性差別と闘ったウィニー・マンデラがいる。それに重ねてPanafrican (united african nations)の運動がある。

私たちの会の趣意書に共感して長いメッセージを下されたBuuba Diopさんもその一人である。彼はセネガル・ダカール大学の歴史学の教師だが全アフリカの平和運動と識字教育運動のリーダーでもある。彼からのメッセージは昨年5月のシンポジウムで紹介したが、ここでもう一度読み直しておこう。

シンポジウム参加の皆さまへ

私たちは多様な危機に直面する中で、永続する平和、人間の尊厳、社会的・経済的な尊厳、そして正義と連帯をもとめる、アフリカの人々の千年を超える闘いを引き継ぐ者として、あなた方が実りある成果を得られるよう願っています。〔中略〕

私たちはいま地球上のすべての者が直面しているポピュリズムとテロリズムの危険に気づいているすべての男女老若に訴えます。今だからこそ、改めて、平和と連帯、相互の尊敬と優れた実践を分かち合う教育に更に努力をつくすことを。〔原文仏語〕

9 条の理念はここでも、注目されている。私たちの趣意書へのアフリカ諸国〔セネガル、アルジェリア、モロッコ、の友人達〕からの好意的な反響は決して唐突でもなく、私たちの独りよがりでもないのである。そのためには私たち自身が、私たちの思いを、アフリカの千年を超える屈辱と闘いの歴史に重ねる想像力が求められているのである。それはまづ、無知であることの自覚からはじまる。自戒をこめて。(2018, 8, 3)